

『日本アジア研究』第11号（2014年3月）

出征中の中国大陸で発症して ——ハンセン病療養所「星塚敬愛園」聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

ハンセン病療養所「星塚敬愛園」に暮らす90歳代男性のライフストーリー。
坂口守義（さかぐち・もりよし）さんは、1916（大正5）年、熊本県生まれ。出征中の中国でハンセン病を発症し、内地に送り返されて、1941（昭和16）年7月、星塚敬愛園に入所。2010年6月20日の聞き取り時点で、93歳。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、金沙織（キム・サジク）。2011年1月23日と4月22日に、語り手本人を前にして原稿を読み上げながらの、原稿確認と補充聞き取りをさせていただいた。補充聞き取りでの語りは《 》で示す。

坂口さんの語りからは、「反骨精神を貫いた人生！」との矜持が伺われる。徴兵検査甲種合格で、1937（昭和12）年1月に「入営」後、村の娘から手紙が来ると、班長が「その女に手紙を出すな、と言え」と命じるのに、「わたしにはそのひとにそんなことを言う権利はありません」と、軍隊での「成績」への悪影響をまかまわずに、抵抗。

ハンセン病が発症して、内地に送り返された1940（昭和15）年11月、門司港上陸直前に、伸び放題になった髪の毛を刈りにきた看護婦が、完全防護の着衣等に身をくるんでいるのを見て、髪の毛を刈ることを拒否。けっきょく、看護婦長に普段のままの着衣での散髪をさせている。

1944（昭和19）年、まだ戦時中に、「外出禁止」の療養所を抜け出して、監視員に見つかり、「監禁」の処分を受ける。監禁が解けた彼に、事務部長が「始末書を書け」と要求するも、すでにいちばん重い監禁の処分を受けただけで十分と、拒否。

同じく1944（昭和19）年、園内結婚をした彼は、園側からも自治会からも「断種」を求められるが、拒否。断種しなければ「夫婦舎」に入れないというのに対して、園を抜け出して、故郷の役場で婚姻届を出し、それをもって正式な夫婦であることを園長に認めさせて、「断種」を拒否したまま、1950（昭和25）年時点で「夫婦舎」に入居している。

妻が妊娠し、敗血症のため「流産」したときには、胎児を自分で始末し、「妊娠」を疑う女医をやりこめている。

さらに、戦後になって、入所者自治会が一定の権限をもつようになり、自治会の主導権争いが激化したなかで、代議士や警察署長を相手にしても、抵抗の姿勢を崩さなかったという。あるいは、金員でもってまるめこもうとする園長に、そのカネを突き返すなど、坂口さんが「敬愛園での生活は抵抗の生活だった」と、みずから評しているのも頷ける。

* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学

** くらさか・あい、埼玉大学非常勤講師、社会学

本稿は JSPS KAKENHI Grant Number 22330144, 25285145 の助成を受けた研究成果の一部である。

原稿確認の作業が一段落したあと、それまでは言葉少なかった「戦争体験」について、あらためてうかがったところ、じつは、自身の「戦歴」の克明な記録を残している、という。坂口さんは、「兵隊としての体験」を語りたくなかったわけではなく、おそらくは、わたしたちが「ハンセン病患者としての体験」を聞いたがっていると判断して、ほとんどもっぱら、ハンセン病体験を語ってくれたものと思われる。一連の追加の語りのなかで、初年兵に「生きた捕虜」を銃剣で刺し殺させる「訓練」にあたったことなども語ってくれた。「いま考えれば、身震いするようなことが、当時は平気でできてしまった」と。こうして、貴重な語りを聞き逃すことを避けられて、聞き手としては、遠慮せずにお聞きしてよかったと思う。

なお、語り手が「ふくししつ」と発音していても、時代状況からして、療養所が実質的に「収容所」にほかならず、管理が厳しかった時代の「事務別館」をさす場合には、「事務別館（ふくししつ）」と記載することで、意味と発語の双方を記録できるように工夫した箇所もあることをお断りしておく。また、〔 〕は文意を明確にするための聞き手による補足である。

キーワード：ハンセン病、隔離政策、ライフストーリー

出征中の中国大陸で発病し、内地後送に

わたしから自己紹介をさせていただきます。わたしは、出身は熊本県です。大正5年生まれで、今月までは93歳です。敬愛園に入所しましたのが、昭和16年7月30日です。〔それ以来〕69年になりますかね。

それで、わたくし、発病は、中国大陸です。揚子江〔流域〕の長沙ちゅうところの戦闘が終わったあとでした。それが、昭和15年の9月13日でしたですね。一戦争、長沙作戦が終わりまして、後方に下がって、ちょっとゆったりした気分になって、ドラム缶で風呂をたてて、入っておったところ、戦友がですね、「坂口、おまえは、顎（あご）の下に、赤くしたところがあるぞ」って言うもんですから、「ああ、そうか」ちゅって触って見たら、知覚（かんじ）が薄いんですね。これはおかしいなと思って、すぐ軍医のもとに診察に行きました。で、そのほかに感じたことがあったもんですから、いろいろ現況を話しましたところ、〔わたしを診察していた〕軍医さんが、大きなクレゾール水（みず）の入った洗面器に、最初、聴診器をグサッと入れたですもんね。そして、こんだ、自分の腕を両方まくって〔やはりその洗面器に〕突っ込みましたもんだから、これはなんのことかと、わたし、もう、頭の中、真っ白くなりました。そしたら、「おまえは、すぐ入院だ」ってことで、部落のはずれの馬小屋みたいなどころに、わたし1人、長いこと、入れられて。晩になったら銃声でするんですよ。自分は〔武器ひとつ持たない〕丸腰でおるのに、これはどうなったかなと思って、ひじょうに不安な気持ちもありました。むこうではもう、ハンセン病ってわかっと思ったんでしょね。部落のはずれの馬小屋に藁（わら）を敷いたところに入れとって、どうかしたときには、配食を忘れて一日中持ってこんときがあるんですよ。衛生兵が「あんたはどんな病気？」って聞くから、「自分はわからん」って言うたところ、「自分の病気もわからんで、どうするか」ちゅって、ご飯も持ってこんのですよ。それで、わたしが、晩、一生懸命、咳しよったら、兵隊が軍医を連れてきましたですよ。軍医さんがわたしを診察しながら、「あんたは、だいぶん苦勞したんだろうねえ」って言われるもんだから、

「はい、昭和12年の8月から北支に渡って、北支をずうっと転戦して、杭州湾敵前上陸を経て、南京攻略戦、武漢三鎮攻略戦、そしてこんど、長沙作戦を経て、病院に入ります」言うたら、「そうかあ。だいぶん苦勞したんだなあ」って言うて、軍医さんから慰勞の言葉を受けてました。そうしたら、しばらくしたら、ご飯をわたしに持ってこなかった衛生兵が謝りに来ました。「上等兵殿、とんだ過ちを犯しました。わたしは初年兵です。ほんとうに上等兵殿に失礼なことをしました。許してください」ちゅうて、それからのご飯を運ぶようになりましたですね。

それから、内地後送〔の命〕を受けて、南京の陸軍病院に行つて、輸送船に乗つて、11月、いよいよ門司港に上陸するちゅうところで、「兵隊さん、あした上陸しますから、髪をつみましようね」ちゅうて、看護婦さんが来たんです。何ヵ月って髪をつまんから、もう〔髪の毛〕こんなに〔伸び放題に〕しとったんですよ。〔看護婦さんを〕見たところ完全防護ですよ。長あーい手袋をして。長靴を履いて。胸当てはゴムのあれですよ。それを見たわたしは、もうほんと、頭にきました。「絶対〔髪は〕つません。あんたがたがおれをどういう待遇したか、内地のひとに見せるんだ」ちゅうて、わたしは抵抗しました。軍医さんやらだれやら、手を変え品を変えて説得に来ますけども、わたしは「絶対、つまない。このまま、おれは内地に上陸するんだ」ちゅうて抵抗しとりました。もう、いよいよ上陸する2、3時間前だったでしょうか、年取った50すぎの、看護婦長さんでしょうね、そのひとがニコニコして笑つてきて、「兵隊さん、兵隊さんの髪をつむのに、長い手袋なんかはめて来たらしいですね。失礼なことですよねえ」ちゅうて、わたしを説得しました。そのひとの言葉にほだされて、もう〔抵抗は〕よして、つんでもらいました。頭を洗ひよったところ、看護婦さんたちが見にくるんです。そしたら、「あら、この兵隊さん、かわいい兵隊さんだね」ちゅうの。まだ20いくつですからねえ。

いよいよ、内地に着きましたところ、こんだ、上陸するとき、「兵隊さん、すみませんけど、担架に乗ってください」ちゅうんですよ。「わたしは元気でしょ?」「いや、担架に乗ったほうがいいですよ」ちゅうから、もう仕方なく担架に乗つて〔陸に〕上がったんです。上がつてみれば、女学生の群がいったい並んどつて、わたしが担架に乗つとるもんじゃから、「兵隊さん、戦地で苦勞したんでしょう」って、泣いてすがつて、いろんなことを聞きました。それで、いよいよ、小倉の陸軍〔病院〕へ着きました。看護婦さんが「はい、兵隊さん、着きましたよ。ベッドに上がりましようね」って、担架のバンドを外してくれて。わたしがヒョイと立ち上がったんです。そうしたら、看護婦さんたちが〔びっくりして〕逃げた。動けん重症者て思われたんでしょ、担架で運ばれたから。それがヒョッと立ち上がったもんですから、もう、看護婦さんたちがたまらんで逃げたですよ。

恵楓園が満床で敬愛園へ

そういうことで、小倉の陸軍病院から熊本の陸軍病院に移つて。ちょうど昭和16年の5月でしたですか。軍医さんが来て、「あんた、このまもうちに帰るか?」って聞かれた。「いや、わたしはうちに帰れる顔はないです」。陸軍病院のすぐそばが恵楓園だったですよ。それで、「療養所があるそうですから、そこに入ります」って言つたら、軍医が見に行つたらしいです。「いま、恵楓園

は満床だから、入れんらしいぞ。あんたは2、3ヵ月、病床が空くまでうちに帰つとれ」ちゅうから、帰つとったところ、熊本の陸軍病院にいっしょに入つとった戦友が、この敬愛園に先に来とったんで、手紙をやりとりするうちに、「敬愛園、いいところだよ。来ないか」ちゅうことで、昭和16年の7月30日、まあ、そのころまでは旅行気分だったですね。ここに来て、友達が先に入つともんだから、受付に行かずに友達の部屋でちょっと遊んどって、夕方になってからここの受付に「入園したくて来ました」「おまえはどっから来た?」「自分の家から来ました」「ウソ言え! おまえは療養所ゴロだろうが。あっちこっち、療養所を流転して入つとるんだろう!」「いや、そんなことないです」言うたけども、もう、犯罪者扱いですよ。それで、若かったですから、25歳だったですからね、青年舎に入ったところ、毎日点呼に来るんですよ。わたしが障子に隠れとって「はい」って返事したら、「おまえ、顔出せ!」何ヵ月って、そんなして点呼を受けました。

《[ここに入所したとき]名前のことは、「偽名したほうがいいぞ」って。「わたしはそんな必要はありません」って、本名(ほんめい)で通しました。[解剖承諾書のこと]わたしは記憶はないです。それはなかったと思います。わたしはもう、最初から、犯罪者扱い。最初から、園との突つきあいがありましたですからね。》

〔どの時点で自分の病気が「癩」だとわかったか、ですって?〕あの、野戦病院から野戦病院に移るあいだは、カルテを個人個人に渡しますもんね。わたしの、病名は書いてなかったですね。症状だけ書いてあったですよ。それで、あのころ、医者診断書は横文字でしょうが。衛生兵なんかは、軍曹あたりまではその横文字を読めない。それで、熊本の陸軍病院におるまで病名はぜんぜんわたしたちも明かさねずに、退院するとき「退院証明書」をもらったら、「癩」って書いてありました、漢字で。それで、びっくりしました。〔当時、わたしにも「癩」は怖い病気だっという知識がありました。〕陸軍病院におつたら、舞踊団、演芸団なんか慰問に来ますもんね。それで、わたしたちは内緒で見に行っておりましたよ。ところが看護婦がこっそり着物〔の袖〕を引いて、「こっちへ来なさい」。《わたしたちは、他の兵隊といっしょにおることは危険なもんですからね、袖を引っ張って、病棟に連れていきました。》軍隊ではもう、ひじょうに〔「癩」に対する〕偏見が激しかったですね。

軍隊では女性からの手紙は御法度

〔わたしのちいさいころのことですか?〕家業は半農半漁です。海に近かったからね。半分は漁をして、半分は畑(はた)仕事ですね。父は病気で仕事はできませんでした。胃病だったですね。母が1人で働いておりました。

〔きょうだい〕5人おったですね。わたしは長男です。次男は戦死しました。姉が2人で、妹が1人。それで、長女の息子にわたしの跡を継いでもらいました。

わたしは学校は小学校を出ただけです。うちが貧乏だったから、むかしの言葉で丁稚奉公ですよ。熊本市内の化粧品店に行きました。化粧品店で1年ぐらいい働いて、あのころは軍隊が男児の憧れだったですから、軍隊に行くには体を鍛えにやいかんて、こんだ、農家の手伝いに行きました。1年ぐらいい農家の手伝い行って、ものすごく働くもんだから、「もっと働いてくれ、もっと

働いてくれ」って言われるけど、自分の家のことも見らんと。母1人で働いてますからね。[うちに] 帰って、昼は畑を耕し、晩は漁に出ておりました。それで、わたしは、若いころ朗らかですね、ひじょうに村では人気があったですよ。軍隊に行ったとき、[村の] 娘から手紙が来るのに、「坂口さんがおらんようになったら、村は火が消えたようになった」って。また、道路んことをジダって言うておりましたからね、「坂口さんが通わんから、ジダも減らんようになった」。

〔徴兵検査は〕甲種合格です。甲種合格で、昭和12年の1月10日に入営しました。正月、軍隊に行つて、初年兵で、ものすごく鍛えられました。そして、8月には出征ですからね。軍隊行く前に先輩たちが言うには、「おまえ、軍隊へ行ったら、ひとが箒(ほうき)取るときは、おまえは雑巾を握れ。ひとが班長さんの巻き絆(はん)を取るときは、隊長の足を拭いてやれ」って、そんな言うていたけど、軍隊ちゆうとこへ行って見て、びっくりしましたわ。ほんともう、隊長さんの機嫌取りばかりですな。《上官に、みんなが媚びるでしょうが。もう、ちょっとうんざりしましたね。》

ほいでもう、軍隊へ行ったらすぐ、班長さんがわたしを呼びかた、「坂口！」「はい！」って言うて入つていったら、「おまえ、なんとかさん知ってるか？」びっくりしましたよ。わたしの交際していた女の名前を言うから。「はい、知っています。友人です」って言うたら、帳簿の下から手紙をヒョッと出して、「おまえ、読んでみれ！」って言うから、「わたしはひとの前では手紙は読みません。読みたかったら、班長さん、読んでください」って言つたら、「おまえ、手紙を出さんように、この女に言え。おまえの成績が下がるぞ」って言うから、「わたしは、そのひとに、そんなことを言う権利はありません。そのひとの自由意志です」って、ここでも抵抗しました。そしたらですね、わたしが入つた部隊で1番になった兵隊の女は自殺しましたよ。「手紙は絶対出すな」って、その女に〔手紙を〕出したらしいですね。その女は自殺しました。しかし、その男はトップでした。15人までが上等兵に進級するっていうてた。わたしは17番で、入りませんでした。そうすると、晩、寝とつたら、週番兵が来て、「おい、坂口！」起こすから、なんだろうかと思つたら、「おまえ、女から手紙が来とるぞ。これが中隊長に知れたら大変だから、こっそりおまえのところを持ってきた」って言うて、そんなして持ってきてくれたひとがあつたです。軍隊はもう、女性関係がいちばんダメでしたですね。しかし、わたしは断りました。「そのひとの自由です。わたしからは断りません」って言うてですね。それで成績は下のほうでした。

それで、わたしは、中国に4年おりましたけど、上等兵のまま帰りましたよ。もう、そのころは、兵隊、とくに下士官が足らずに、内地から来たばかりで、2、3ヵ月教育を受けただけの、銃の操作方法も知らんような人が下士官になって来とりました。そのひと、下士官だから、斥候(せっこう)なんかへ行くと、斥候長で行くでしょうが。ところが帰つてきて報告書を書かにやいかん。《わたしよりも〔階級が〕上の金筋(きんすじ)の伍長さんが》わたしのところへ来て、「上等兵殿、すまんけども、報告書を書いてください。わたしは書き方がわからん」ちゆうてですね、軽機関銃なんかも、どういふふうな記号を書けば〔いいのか〕わからんから、わたしに書いてもらいよつたですよ。《〔敵の〕機関銃の配置なんかがどのくらいあるか、それを略号で報告せにやいかんわけ

ですよね。》

戦時中は敬愛園の「防衛部長」

敬愛園（ここ）に入ったら、もうさっそく、〔体は〕元気だから付添いですよ。不自由舎の付添いに入れられました。1年365日、休みは1日（いちんち）ありませんでした。盆も正月も祭日も〔休みなし〕。朝起きたら、不自由な人たちの床上げ。それから7時ごろなったら、お茶、飲ませ。7時半なったらご飯だから、炊事場にご飯取りに行き、配食して。そして、食器洗いなんか終わったら、こんだ、掃除。10時になったら、また、お茶の時間。それが終わったらこんだ、昼食でしょうが。3時、またお茶。夕食。夕方になったら、床をとって、病者の人たちを寝かせかたです。重病人がでたら、いまみに電話はないし、医局まで夜中にお医者さん呼びに行っていましたよ。2年ちょうど付添いしましたが、1日も休みがないです。もう1年中、365日、働きづくめだったですよ。そりゃあもう、きつかったです。

とにかくあのころは、付添いはせんといかんし、奉仕作業はあり、もう朝から晩まで働きづくめですよ。そして、いよいよ、こんだ、戦争が激しくなったら、壕掘りだったです。わたしは、軍隊出ちゅうことで、ここの防衛部長だったですもん。《あのころ、翼賛会というてです、園に協力する〔入園者の〕団体があつたんですよ。それで、役職を付けておりました。わたしは軍隊帰りということで、ここの園内警備の部長になりましたね。》若い人たちを集めてです、壕を掘って。そして、〔わたし自身も〕ツルハシの長いのを振りましたよ。あのころ、わたしは手足は完全だったですからね。ツルハシ1日握ったたら、もう夕方になったら、指を1本1本、こう、開かせんとあかんですよ。そして、いよいよ防空壕が完成したら、病棟の人たちをみーんな、その防空壕の中に入れて、こんだ、そこで看護しかたです。それで、わたしは1日も防空壕に入ったことはありませんでした。防衛部長だったですからね、毎日、外におつてです、警戒警報が出たら、「警戒警報が出た！」って放送せんといかんしです。

戦争中がまた、ここの空爆が激しかったんですよ。もう、舎なんかやられたこともあつたですよ。防空壕に埋まると人たちを、わたしは手で掘り出して、人工呼吸したことがあるんですよ。そしたら、わたしが人工呼吸しよるのを見とって、女医さんが「あんたは人工呼吸がうまいですねえ。どこで習った？」「軍隊ではこんなことは年中しておりましたよ」「ああ、そう」って言うつたんですけども。人工呼吸したけど、やっぱり、生きあがらなかつたですねえ。

無断外出で監禁室に入れられた

〔外出制限ですか？〕けっこう〔みんな無断で外へ〕出ておりましたけどです。患者が出ていくのを患者が園に通知したら、カネをもらえよつたらしいです。そういう人たちを、わたしたちは「イヌ」と言っておりましたけども。そんなしてです、わたしも若かつたもんですから、《もう1人の友達と》看護婦さんを連れて、一日、日曜日に鹿児島市に遊びに行つたことがあるんですよ。そしたら、〔帰路〕志布志駅に、晩、ちょうどもう、正月、2、3日前でした。この付近の女の人たちは、都会に働きに行つてですから、志布志の

駅は〔帰省の〕若い娘ン子でゴった返しておりました。わたしが待合室におつたら、駅員が「すいません。乗車券を貸してください」と言うから、ああ、こりゃ、おれ、「癩」ってわかったんかなと。あのころ、わたし、まだ手はきれいだったですから、こうして〔パチッと指を〕わざと鳴らしてみせて、切符を出して。したら、「ありがとうございます」と返してきた。そしたところが、敬愛園（ここ）の職員が出てきて、「おい！ おまえはおれの言うことを聞かんと警察に通知するぞ」って。「警察」の声を聞いたもんですから、付近におつた娘ン子が蜘蛛の子を散らすように逃げるんです。それでわたしが、その職員を外に呼んで、「あんたは、どうして、あんな人の中で、警察なんか出すか！」「どうもすまんかった」「あんたは、ほんなら先、帰っとなつてくれ。けして悪いことはせんから」。そうしたら、職員がまたこんどは、そこの永野田（ながのだ）駅って無人駅に待っとなつて。そして、捕まえて、監禁〔室〕に入れられたですよ。《〔病気も軽くて身体も元気だった友達は「おれはうちへ帰る」と言った。〕そしたら、「君はもう、永久追放だぞ！ 来ても、入れないぞ！」って。わたしに、「あんたはどうするか？」「わたしは園に帰ります」って言ったら、「そしたら、おまえは監禁だ」って言って》監禁〔室〕に入れましたね。《〔当時は、追放も処罰のひとつでした。罰として〕追放って、しておりましたね。園から出される。「永久追放！」》

監禁〔室〕に入るときは、厚い扉（とびら）があつてですね、帯とか紐類はみんな取り上げてしまいました。《自殺防止らしいですね。》着物は着とるけども、帯なんかはない。ほして、ご飯は、ちいさい窓のあつところから、新聞紙に包んで〔差し入れられる〕。見てみたら、真っ黒になった麦ご飯〔の握り〕が、小さいのが2つと、大根の漬け物が2きれ入つとりましたな。わたしはもう、そんなものは食わずに。そしたら、わたしの隣に女のひとが入つとったですが、男の職員が「ほれ、ご飯」って出したら、女のひとが中から手を握って、放さんのよ。その職員がたまがって、「放してくれ、放してくれ」。そういったことがあつた。

あのころ、わたし、交際しとった女がこの中におりましたですからな。夜中になつて、「ワッショイ、ワッショイ、ワッショイ」ちつて、女の声がするんですよ。おかしいなあ、こりゃ、なんの声かなと思うとつたら、わたしの交際しとる女ともうひとり女が、ちいさい鍋に「うどんを炊いたから、うどんを食べ」ちつて、持ってきてくれました。それで、「あんたがた、なんであんなに騒いだの？」ちゅつたら、「事務別館（ふくしつ）の横に、梯子があつたから、その梯子を取り上げて、ワッショイ、ワッショイちゅうて、別館（ふくしつ）のまわりを一回りまわってきたよ」と。そして、梯子を掛けて〔塀を〕登つてきて、うどんをわたしに食べさしました。〔わたしは〕うどんだけは、手でこうして食べました。2日間入つとったが、握りご飯は1つも食べんから、いっぱい溜まつとった。そしたら、職員が「おまえは軍隊に行つたくせに、〔監禁が〕怖かつたのか。ご飯も食べきらんだつたのか」ちつて言うから、「バカなことを言いなさい。あんなとこに入つとつても、ご飯食べたら反省の気持ちちはならん。わたしは反省の気持ちでご飯食べたつたんだ」ちゅつて。

ほして、わたしは、着物を入れる戸棚があるんですもんね。そこに、乗つてみた。「おい、坂口、きょう、おまえ、出ていいぞ」って言ったら、わたしがそこから、ポーンと下りたら、それも職員がびっくりして。ほして、こんどは、

出たら、事務部長が出てきて、わたしに「始末書を書け」と言うからね、「わたし、始末書は書きません。監禁〔室〕に入ったうえ、始末書なんか要るもんですか。監禁がここでいちばん重い刑罰でしょうが。ぜったい書きません」ちゅうて書きませんでした。〔それは〕昭和19年ですから、まだ戦争中でした。

〔戦時中は、ここの食べ物はひどかったですよ。〕食べ物は、芋を切って干したの。もう、外のほうは腐っとるから、ご飯にまで腐った臭いがするんですよ。それとか、大豆ご飯とか、麦を粉にした皮のほう〔の麩（ふすま）〕。そんなもんばかり。ここはもう、グランドなんかも畑にして芋をつくりましたですからね。ほとんどもう、農作業ですよ。治療はもうほったらかしですよ。

〔昭和20年8月15日ですか？〕覚えています。もう、ものすごい、アメリカ軍が、「日本が負けた」という〔ビラを〕落としましたね。〔玉音放送は〕聞いた、外でな。ガーガーで、あんまりはっきりは聞けなかったけど、だいたいの意味はわかりました。ショックでもありましたけど、やっぱり、ホッとした気持ちがありましたね。

あそこ、日本の軍隊がおらんようになって。いろいろ食べ物とか物資を置いて、軍隊が逃げたでしょう。それを、みんな盗（と）りに行ったんだ。わたし1人、取りに行かんかったですね。そしたら、近所隣で、「呑気なひとがおるもんじゃ。ひとはもう、物資取りに命がけになって担いでくるのに、坂口さんだけは1人、グーグー高いびきで寝てる」と言ってる。わたしは取りに行きませんでした。軍隊の品物を取りに行ったら、どうなるもんかちゅうてですね。わたしは行きませんでした。

断種には徹底的に抵抗

それからいよいよ、ここで結婚したんですが。結婚したのは〔昭和〕19年。これがまた大変だったんですよ。断種せんと夫婦舎に入られん。それで、わたしは断種はしておりません。徹底的に抵抗しました。もう、ここの自治会も、断種せんと夫婦舎に入れんちゅうことで、〔断種をした順に〕入る順番を決めるんです。わたし、ちょうどそのころ自治会の代議員会の議長をしようとしてたんですけど、議長を下りてですね、徹底的に自治会〔執行部〕にも抵抗しました。「あなたがたは入園者ではないか。どうしてあんたがたは、園のお先棒を担ぐんか！ 反対するのが当然じゃないか」ちゅうて、徹底的にわたしは抵抗して。ほかの人たちはどんどん断種して、順番が決まるけど、わたしは断種せんもんですから、順番が来んですよ。そしたら、ある日、事務別館（ふくしつ）に行ったところ、職員が「坂口さん、あんたは断種はまだでしょ」と言う。「はい、まだですよ」「したほうがいいですよ。して、早よ、夫婦舎に入ったほうがいいですよ」言うですもんね。「お医者さんの都合をうかがって断種してもらいなさい」「わたしがどうしてお医者さんの都合をうかがわにゃいかんですか。わたしに用事があつたら、むこうからわたしの都合をうかがいに来るのが順当じゃないですか」「坂口さん、そんなに文句を言わずに、断種しなさい。断種しても夫婦関係には関係ないらしいですよ」。それで、わたしが、そんなとき、「バカなこと言いなさい！」とて言うて、夫婦関係の微妙なことを話したんですよ。そうしたら、女の職員もおりますもんだから、恥ずかしがってですね。「坂口さん、もうそんな話、せんでもいいじゃないですか」とて。「いいじゃないですか、話を切り出したのは、あんたがたでしょうが」。

それで、もう、切らずに。ほいで、わたしはもう、外へ出て、入籍してきてですな、その証明書を持ってきて、園長と直接交渉ですよ。「あんたは、ここで、いろいろ法律的な権限もつとるだろうけど、わたしは、国家が認めとる入籍〔証明書〕を持ってきましたよ。園長先生は、どうしますか？」そしたら、「まあ、おまえがそんなに言うのなら、認めよう」って言うて、わたしも夫婦舎に入りました。

〔結婚届は、どうやって出したか、ですって？〕わたしは〔無断外出して〕自分で行ってですね。〔故郷の〕役場に行ったら、わたしの友達がちょうど役場に入っとりましたからな。証人が2人要るちゆうことだったですから、ひとつは、わたしの印鑑で、わたしの親類のひとの名前して。ひとつは、ここに〔療養所の〕先輩がおったですから、無断だったですけど、そのひとの名前の印鑑をつくって、ほして、入籍してきて。

《わたしが夫婦舎に移ったのは〔昭和〕25年だった。いちばん最後のほうですね。錦江寮（きんこうりょう）っていって、プロミン〔のための〕募金をしたので余ったカネで作ったらしいですな。》

《〔個室の夫婦舎に入れるまでは〕夫婦者でありながら、雑居生活ですよ。》そのことについても、大西〔基四夫〕先生と、ものすごい、わたしは議論したことがあるんです。大西先生が言われたのは、「おまえたちが、あんな雑居の夫婦生活を〔していることが〕な、おれには考えられん」って。「あんたはそういうことを言うてるが、わたしたちも外〔の社会〕で夫婦生活したら、箆笥の音にでも気兼ねして夫婦生活するはずですけども。仕方ないですもん」て言うてですね、大西先生ともそうとう議論しました。12畳半に4夫婦ですもん。火鉢がもう境目ですもん。寝るときは、火鉢で境目をつくってですね。それで、もう朝起きたら、お茶飲みかた、笑い話ですよ。「坂口さん、あんたの腹の上、なんとかさんが大きな足を乗せて寝とったよ」。隣のおんなのひとが、大きな足を腹の上に乗せてきた。「はい、わたしは撥ね除けるのに精一杯だったですよ」って言うて。そんなだったですよ。

〔断種しなくて、女房が妊娠することはなかったか、ですって？〕それがね、最初の女房（おんな）は、妊娠しとったんですよ。わたしは、これはたしかに妊娠しとるなと気づいとったですよ。そしたところが、敗血症でものすごく熱が出た。いまは抗生物質があるから、ばい菌が入ってもすぐ治るでしょ。あのころ、なかったですからね。それで、わたしの友達の女の人たちが付添いしてくれたが、わたしは、「ひよっとしたら出血があるかもしれんから、そのときは医局に言わずに、わたしに知らしてくれ。〔それと〕古布団があったら、綿を集めとってくれ」ちゅった。夜中、きたですよ。ひどく出血して。それで、わたしが手当てして。〔流産した胎児を〕抱いてみたら、もう、目とか足なんか、形がわかっておりました。そして、わたしが始末して。あくる日、女医さんが来たらしいですよ。そして、こうして〔女房の〕乳を見て、「たしかに、このひとは妊娠しとるはずだがなあ」って言われたらしいですよ。それから、わたしがその女医さんのとこへ行って、「先生、先生〔の専門〕は内科でしょうが。内科は詳しいても、婦人科はあんまりわからんでしょう。わたしが婦人科の講義をしましょう」って言うて。そしたら、その先生が泣きだした。大西先生が来て、「坂口、おまえはまた、先生にいらんことを言つとるんだろう。おまえ、早よ、あっちへ行け」っち、大西先生から追い出されたことがあります。とに

かくもう、わたしのここでの生活は、抵抗の生活だったですね。

治療は真面目に励んだ

治療は、わたしはこれはもう熱心だったですね。〔最初は〕大風子油。治療したいもんですから、最初、走って行って、して。また、こんど、後ろへ並んでね。そうすると、古い人たちがひやかすんですよ。「おまえたちがそんなに治療したって治らんだよ、この病気は」。もう、腹が立ってですね、はい。それでも、わたしは治療だけは熱心にしました。〔ただ〕あの油が寒いときは固まるでしょうが。火鉢にあぶって、ぬくいのを入れてやるんですよ。痛いなのって。揉んでほぐさないですね、〔化膿しちゃう。わたしも〕化膿したことがありました。この腕がですね。

〔戦後になって〕プロミン、しました。プロミンはよお効きましたですね。〔その後も〕10年ぐらい前までは、DDS 飲んどったんじゃないでしょうかね。わたしは、最初は「結節らい」っち言ってた。病気〔の型〕が変わるんで、このごろ「神経らい」になりましたですね。手が曲がる、足が垂足になる。これ、「神経らい」って言いますもんね。ここに来てやがて70年になるけど、病気、重（おも）らなかつたほうですね、わたしは。鈴木〔正和〕先生が検査して、「ン、おかしいね。何年前は菌がおったのに、菌はおらんようになった。おかしいねえ」って言うたが。〔看護〕婦長さんが、「先生、坂口さんは〔治療を〕1日も欠かしたことはないですよ」って言っておりました。治療だけは真面目にしました。

自治権獲得闘争

《〔終戦後〕自治権獲得闘争委員会っていう委員会をつくりました。その交渉は、大変だったですよ。園も幹部が総出で、わたしたち委員会結成した委員が出てですね、毎日もう、いろいろなこと〔議論しました〕。最初わたしたちが要求したのは、食糧予算の開示と、それから物品倉庫の開放でしたですね。この2つを要求項目（じょうけん）にして闘争しました。園がなかなか、それを認めようとはしませんでしたですね。それをもう、毎日毎日交渉して。そうすると、もう後では、全入園者がわたしたちの会場を取り巻くようになりましたですから、園も軟化して、食糧予算の開示と衣料倉庫の開放を認めましたです。

〔そしたら〕いろいろ、たくさん、倉庫に入れて、〔入園者には〕出さんのがいっぱいありましたね。もう、衣料倉庫なんかには、入園者にはなんにも与えずに、山みたいに積んでおったですよ。それを整理する女の職員なんかもう、わからんように、腰回りに布切れをいっぱい巻いて出るのがわかりましたよ。そんなのは捕まえてですね、みんな取り上げました、わたしたちはね。炊事場なんかでも、職員が砂糖なんかをそうとう持って出るのもわかりましたからですね。そんなのを監視するが大変だったですよ。——〔この闘争をやったのは〕たしか〔昭和〕21年ごろじゃなかったでしょうかね。》

患者自治会の主導権争い

〔そうやって自治会が力をもつようになったあと〕ここで、患者同士の自治会の主導権争い、大きな争いがあったんです。《それがまた激しかったんですよ。考え方はおんなじでしょうけど、はっきり言うて、自治会を獲得したら、

やっぱり、そのひとたちは、品物をこう、取るんですよね、一方は。こんだ、それを取らないほうとの争いが……。わたしはそうと思います。〔自治会の主導権を取ると〕みんな、いい作業に就けるでしょうが。ここで作業に就いて賃金をもらうことが唯一の収入源ですからね。あころ、みんな元気でしょうが。〔だから、入園者〕ぜんぶ〔は作業に〕就けないんですよ。あとで話を聞いて、「どの派につけば、どの仕事に就けンじゃ」って言うて。わたしや、あの話を聞いて、ガッカリしました。わたしはもう、正義一本で行ったつもりだったんですけどね。〕

それ、わたしは一方のほうの幹部だったです。〔わたしは大海さんのほうでした。〕《〔大海さんは〕温厚なひとでした。ひとの話をニコニコニコニコ、はい。一方のひとは、もう、口八丁手八丁です。口もうまいし。いろいろ宣伝がもう、全療養所にまわるんです。もう、率直に言って、なんにもせんあしたたちが悪人みたように、全療養所にまわっておりますね。裁判所にも、わたしたちの書類が、一人ひとりのことが行っておりますね。〕

《〔その争いは〕長いこと続きました。選挙ごと〔勝ったり負けたりしました〕。それがもう、一方のひとたちはもう、悪いことをするんです。投票用紙を見てみたら、選挙〔管理〕委員になつとるひとたちが——もう、そのひとたちも〔どっちの陣営か〕ハッキリしとるんですからな——消して書いとるのが、裏から見たら、わかるんですよ。「大海」って、跡形〔かた〕が付いとつとです。それにこんだ、「金丸」って書いてて。その書いたひとなんかも、むこう、女と男のひと、2人、ハッキリ、わかりよつたですよ。そういうことをしよつたんですよ。わたしたちが、「〔投票用紙には〕このひとを書け」って言って、病室なんかでもって〔説得しても〕、一時〔いっとき〕して行つて見たら、もう、こんだ、金丸〔正男〕さんの票に……。「もう、おまえたちは変えられたか」ちつて、油断も隙もありませんでした。そんなことだったですよ。〕

〔けっきょく、金丸さんが大島青松園に追放になったのは〕あのひとがおつたら治まらんからですね。わたしたちのほうに与した職員は〔金丸が会長に選ばれたときには、敬愛園を〕クビになりましたよ。《ひとりの職員が一生懸命荷物片づけするから——名前もハッキリ〔覚えてますが〕、川島先生ちゅう職員〔せんせい〕——、「あんたはどこに行きますか？ 何してるんですか、この忙しいとき？」言うたら、「わたしは転任です」。ちょっと、そのひと、わたしたち寄りだったですからね。恵楓園に、横滑りですよ。川島先生ちゅうて、共産党から転向したひとだった。戦時中、あのひとだけは、もう、職員が〔空襲を怖がってみんな逃げてしまつて〕1人になつても出勤してきておりました。よお、わたしと一緒に晩、〔園内を〕回つておつたんですがね。それで、そのひとが話しよつたですよ。「わたしは共産党だったから、いちばん知つとるが、もしここに米が1俵あつたとしたら、坂口さん、わたしたちの療養所に渡るか、また、外の働くひとに渡るか？ この療養所には絶対、渡りませんよ。働くひとたちに、これを食べて、おまえたち、働け！ っていうですよ」って、その話をわたしにしてくれよつたんですがね。とにかくもう、それはもう、大変な争いでしたよ。〕

あるとき〔いろんなことがありました〕。永田良吉いう代議士の方がおられたんですがね。「みなさんのゴタゴタは、この爺〔じい〕がいちばん知っている。爺が大きな袋に入れていくから、この爺にまかせなさい」ちゅうから、わたし

がものすごく抗議したですよ。《「そんなバカな話があるもんか」。一方は、丸く収めてもろうたら、都合がいいからですね。わたしたちは、もう承知しなかったんですよ。》そしたら、「じつはねえ、相手のほうの若い男が釣りに来たついでに、っていうて、わたしのうちに寄って、『いま、園内でこういうことが起こるとじゃ。あんた仲裁してくれんか』って言うもんだから、[その言い分を真に受けてしまって]来たけど、そういうわけだったんか」言うて、永田代議士が謝りましたよ。

《そしたら、こんだ、園が警察署を頼んでな。そらあ、警察が高圧的に来ましたよ、わたしたちのところ。》わたしの抗議が激しいもんだから、署長が拳銃に手をかけましたな。「あんたは拳銃でわたしを撃つつもりですか？ 撃つなら、ここ[の胸]を撃ちなさいよ」って、わたしが言うたら、《「そんなつもりはなかった」って言うて》署長が謝りましたよ。

《そうしてもう、むこうの連中は、都合が悪いから、こんだ、ハンストを起こしたんですよ。それ、女の先生はちょっとこう、そのひとたちにはあんまりいい感じを持っていませんでしたから、「あんたがたは、そんな変なことして、具合が悪くなつ」たって、わたしたちは治療はしませんよ」って怒って言ったこと、わたしは見ておったですがね。》

そして、こんなことは誰にも話しておらんのですけれども、園長、ここの2代目の[塩沼英之助]園長だったですがな、わたしがものすごく抗議するもんだから、「坂口、きみ、これが欲しいんだろ？」カネ包みをわたしに出しましたよ。わたしはテーブル叩きました。「あんたは、おれをそういう人間と思って見とるんか！ バカなこと言いなさい」。そしたら、園長先生、頭にきて、[のちに]熊本の親類の医者のところの下宿しとったらしいけど、二階のベランダから[下を]通るひとを見たら、みんなわたしに見えるらしいですな。「坂口が来た。坂口が来た」って逃げ込みよったらしいですよ。徹底的に、わたしは追及しましたですからね。

《女のひとたちがみんな、「坂口いう男は箸にも棒にもかからん男ぞっち聞いとったが、事務所に一緒にいて、話してみたら、坂口さんはもう、噂とはぜんぜん違う。ユーモアがあり、やさしさがあり……」。自分の婿さんは[自治会の]部長さんで、その嫁さんは部員だった。「わたしゃ、死んで生き返って、また結婚しようといったら、坂口さんみたいなひとと結婚する。ぜんぜん、噂は違う」。選挙、選挙でしょうが。わたしは、しょっちゅう、上位で上がりよったから、落とすためにですね、「あの男は箸にも棒にも……」それがもう、言うひとがみんなおんなじですよ。「あんたは、箸にも棒にもかからんち噂聞いとったから、恐い思いをしとったが、ぜんぜん、話してみたら違う」。ある女のひとが言うことには、「うちの旦那がここの部長に入った。はじめて部長に入って、その部員をあてに[できるひとを]知らん。『おら、坂口さんのところへ行ってきたよ』」と言うから、『あんたあ、あのひと、自治会の幹部したひとが平部員になるもんな。行ったら、あんたは叩き出されるよ』。そう言うよとったら、10分もせんうちに、『雇うてきたぞ！』っち言うから、びっくりした」って。ひとが困るとときは、手助けするのが当たり前ですよ。そうすると、こんだ、「あんたは、ほんと、箸にも棒にもかからん、ちゅう噂を聞いて、ちょっと、あんたには近づきにくかったんだけど、ぜんぜん違うですな」って。》

園内政治から身を引いて、スポーツ観賞

〔昭和28年の予防法改正闘争?〕あときはですね、わたしはもう〔園内の〕政治にはぜったい足は突っ込まんと、大西先生と約束したから、〔身を〕引いておりました。花輪事件¹ですね、大西先生が〔大海派と金丸派双方の〕幹部を集めて、「おまえたちは政界追放だ。〔1年間の公職停止処分だ〕」って。そしたら、ほかの人たちはみんな納得しましたよ。わたしだけは、「先生の命令では絶対わたしは自分の意志を曲げません。政治にかかわるかどうかは、自分の意志で決めます。この人たちは、先生の言うことを聞いて、ハイ言うてるが、この人たちはあしたからでもまたする人たちですよ」って、わたしは言った。わたしだけは、先生の命令に従わずに、その年、1年はしたけど、それからずっと〔園内の政治にかかわるのはやめました〕。

〔暇になった時間は〕わたしはスポーツが好きですから、スポーツ。自分でするのは大儀で、観賞するのが好き。ただ、勝った負けたを知るんじゃなくて、選手の一人ひとりの記録を取ったりなんかしてですね。それが楽しみでした。相撲なんかでも、十両以上はテレビに出るから、なんも記録とらんけど、序の口から幕下まで、自分の好きな力士（ひと）の記録はぜんぶ取ってですね、このひとはどのくらいの期間で上がっていくかと〔予想する〕。マラソンなんかでも、誰はどのくらいの記録で走るかって、確実に当たりますよ。それで、わたしの最初の女房は目が見えなかったですがな。〔ラジオを〕聞いてって、解説者なんかでも、ちょっと新人なんか出ると、知らんすもん。わたしが「あれはどこ高校出の誰や」ちゅうたら、うちの女房が「おっさんは、解説者よりも詳しいねえ」って言ったりしました。

ゲートボールも、わたしはしませんでした。ここに、釜ヶ崎ちゅうて、呑気者が、遊ぶところがあるですよ。《御歌碑（みうたひ）の前。そこに市会議員のひとたちがテントなんかを寄付してくれましたですね。》そこに集まった。それでみんなが、「坂口は、釜ヶ崎の親分じゃ」ちって。《大阪の釜ヶ崎、あすこは無頼の徒が集まる場所でしょうが。ほれで、敬愛園では、そんな作業もせずにブラブラしとるひとたちが集まるから、みんながわたしたちを「釜ヶ崎の住人」って呼んでたんですよ。》なんもせずに、ぶらぶらしとったですな。しかし、時事放談はやっていましたですな。自治会長の知らんことでも、わたしたちのそこには情報は集まってきました。それで、自治会長が憤慨しておりました。「なんで、おれたちが知らんことを、あすこだけには集まるか」ちゅうて。《後では、園のバスの廃車を譲り受けて、そのバスにみんな集まっていたですね。》

皇太子の送迎に出たら道路を消毒／園長に抗議

〔わたしの反骨精神はどこで身についたか、ですって?〕軍隊でも、わたしは何度か隊長の言うことを聞かずに、別なことをした人間だったですからね。それでも兵隊は、「隊長よりも坂口のほうに付いていったほうがいぞ」って言ったですすからな。隊長さんが「坂口、兵隊を集めて、ここで相撲とらせ」。

¹ 花輪事件とは、1951（昭和26）年に頂点に達した自治会の主導権争いによる入園者紛争事件のこと。

「バカなこと言いなさい。兵隊は一晩中戦争で疲れて、みんな休んでおります。あんたを慰めるため、相撲とるような気力はありません」。そんな言うて、わたしは抵抗しておりましたよ。

母は「なんぼ貧乏生活しとっても、ひとから後ろ指をさされることは絶対するな」言うておりましたですね。もう、わたしの生涯は抵抗の生涯。軍隊に行っては、軍隊に抵抗し、敬愛園（ここ）に入っては——ここ、園長は10代目になりますけど——、4代、5代までは、わたしはほとんどの園長に抵抗しておりましたね。いちばん激しかった抵抗は、4代目で、長島愛生園から園長になって来とったのですが、ちょうどわたしが自治会の副会長しておりました²。で、その道路を皇太子、いまの天皇が皇太子時代、お通りになるから、敬愛園〔の入園者〕も道路に出て、送迎していいちゅうことで、〔外に〕出て、送迎したら、夕方になったら、わたしたちが並んどったところは、もう、石灰で真っ白に消毒したんですよ。それで、わたしが園長に「なんで、あんたはあんなことをするか！ そんなことをするから、この病気は怖いんだちゅうことを、外のひとに植えつけるんじゃないですか！」って、徹底的に抗議しました。その園長は、その晩、誰にも挨拶せずに長島に帰ったらしいですね。宮田唯夫っていう、長島から来とったひと。

傷痍軍人恩給の陳情で国会へ

〔軍人軍属で〕ハンセン病〔になった人〕は、どんなに病気が重かっても軽かっても〔戦傷病者戦没者遺族等援護法に定める第〕3項症以上〔の恩給をもらえる〕。これ、わたしが国会に行つて、陳情してきて、獲得した。それで、ここの東家（とうや）〔斉〕園長³という園長がおったですよ。おんなじ熊本県〔出身〕です。「おい、坂口、国を動かすことは大変だぞ」。熊本弁で、「ぬしゃ、おれも知らんうちに出ていくが、どうしてしてくつとか。国の法律を作らせることは大変だぞ。自治会、全患協さえも、年中、『園長、出てくれ。園長、出てくれ』て言うて、園長を頼りにするが、おまえは一人で出ていくが、大戦果をいつでも上げてくるが、どぎゃんしてくつとか」。

わたしが二階堂〔進〕先生のとこへ行つたら、ほかの陳情客が何人おつても、「そっちは、ちょっと待ってくれ」。わたしのほう、「鹿児島〔から〕何の用事で来たか？」ち言うて。あの田中角栄さんの揮毫（きごう）も、わたしはもろうて来たが。自民党総裁の、茶色の大きな椅子があつてしょうが。「おい、きみ、これへ座ってみれ」って。「これ座るひとは総理大臣になる」って。わたし、座らせましたよ。それでですね、ハンセン病はどんなに病気が重かっても軽かっても〔第〕3項症以上って、決めてきた。そうして、〔傷痍軍人の〕恩給取つても、〔国民〕年金を併給するということも、これも約束してきました。敬愛園（ここ）に〔戻つて〕来て、事務部長にわたしが報告したら、「そんなバカなことがあるか。日本（にっぽん）国民が社会保障と国家保障と両方もらう、そういう法律は日本にはない。おれは、厚生省に勤務してたことがあるんだか

² 記録によれば、坂口守義さんが自治会の副会長をつとめたのは、昭和37年3月から昭和38年7月までのことである。

³ 記録によれば、東家斉医師が園長をつとめたのは、昭和39年から昭和50年のことである。

ら、いちばん知っている。そんなことはない」って言った。「あんたはないっち言うても、こっちはもう、政府と約束してきたんだから」。そしたら〔翌日、自治会の〕副会長が「坂口さん、きのう、事務部長はそんなことないと言うたでしょうが。ところが、事務部長が官報を見てみたら、ほんと載っとるわい。勉強不足だった。すまんかった、って。そんなかわり、坂口には言うなよって」。

〔進駐軍がいたあいだは、軍人恩給は〕停止になっとりました。〔サンフランシスコ講和条約が発効した昭和〕27年から始まりました。それからわたしたちが運動を始めました。ものすごい、陳情に行きましたよ。もう、わたしたちの理論武装も、たいした理論武装じゃない。「わたしたちが外で働いて会社勤めしとったら、会社の重役になっとったかもしれん。外で自営業しとったら、金持ちになっとったかもしれん。しかし、この病気になったおかげで療養所に閉じ込められて、一生出られません」。若い代議士なんか、それ聞いて、びっくりしとりましたよ、ほんと。ちょうどあのころ、自民党の国会対策委員長って、荒船清十郎って面白いひとがおったでしょう。あのひとが「厚生省〔担当の政務官〕を呼べ」って。栗山秀（もみやま・ひで）って女の代議士がおったでしょう。あのひとがハンドバックを下げて、ニコニコしてきた。「おまえ、笑いごとか。おまえは傷痍軍人を療養所に入れたまま、そのままほったとるじゃないか。どうかせい！」「はい、検討します」「検討するじゃダメ。いま、決めよ」って。そしたら、やっぱり、国が国家保障と社会保障と併給するのは、そうとうやっぱり問題になって、官僚が抵抗したらしいですよ。二階堂先生に、「先生、わたしたちは自分たちがクビになるようなことはできません」って。「おまえたちがクビになったら、おまえたちの仕事はおれが捜してやるから、早よ、事務を進めよ！」って言われたらしい。わたしはもう、国会、通いづめだったです。

全患協活動の思い出

わたしは、囲碁とかそういうことはもう、全然ダメです。わたしはですね、50年間、敬愛園の図書〔室通い〕、1日も休みませんでした。つい最近まで。それで、「坂口に会うときは、図書〔室〕に行け」って。なんでも〔読みました〕。だいたいもう、新聞もぜんぶ読みましたね。朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、西日本新聞……。1日も欠かしませんでした。どんなに雨の日でも天気の日でも。わたしはこうと思ったらもう、あれですからね。

最近まで自転車に乗とったんですよ。みんなが「危ない、危ない」言うてくれるでしょうが。そんなに言うのに、もしものことがあったら、そうら、みたことかって人に言われるのが癪（あれ）だからと思って〔乗るのはやめました〕。

〔車の免許は取りませんでした。〕もう、手がこんなでしょうが。ちょうどわたしが〔自治会〕執行部におるとき、隣のHIさんが自動車組合の組合長で、練習場をつくってくれちゅうことで、わたしは、あすこのグラウンドで、坂を作ったりなんかして〔練習場を〕作ってやったことは覚えております。

〔NHK〕テレビの視聴料をタダにしてもらおうのも、わたしが陳情書を出しました。テレビは、わたしたちが社会を覗きたった1つの窓だっていう、そういう趣旨で書いて出しました。〔それは〕昭和37年。わたしが自治会の副会長してたとき。会長さんは目が見えなかったですから、ほとんどわたしが一人で動

いておりましたでもん。

〔ハンセン病療養所の〕入所者に〔国民〕年金を渡す運動も、〔昭和〕37年に光明園であった〔全患協の〕支部長会議で、わたしがいちばんに提案しましたら、みんなが笑いましたよ。「われわれに年金なんか来るもんか」って。あのときもわたしが、光明園でテーブルを叩いて怒りました。「おまえたちは、コロンブスの卵を知ってるか。みんなが卵は立たんちゅうのに、コロンブスは智恵ひとつで立てたじゃないか」。——いちばんに出しました。みんなから笑われました。あのときは、わたしはもう、政治家じゃない。素人で執行部に入っとりましたから。光明園で会議があって、〔その次に〕東京の多磨全生園に行きました。集まってガヤガヤ〔言ったら、いつのまにか〕みんな代表がおらんごとなった。そうしたら、ドヤドヤって入ってきた人たちがおった。「あんたがた、何事か？」ちゅうたら、韓国の入所者（ひと）たちの「なんとか同志会じゃ」って。「陳情に来た」っち。みんなほかの人たちは、もう逃げとるんですよ。「どんなこと？」「あんたがたは、おれたちのことは一つも取り上げておらんじゃないか。おれたちのことも陳情してくれ」。「こんどは、あんたがたのことも入っとる」。そうしたら、みんなが詰め寄ってきた。「わたしが取り上げるちゅうたら、絶対、取り上げます。あんたがたは疑う必要はない」って、わたしは断言しました。そしたら、みんな納得しました。みんな〔政治の〕玄人の人たちは、「あれたちが来るぞ、来るぞ」って、逃げてしもうとるんだ。わたしはそんなことは知らんから、1人〔残っていて〕……。「わたしに任せなさい」って。「わたしがやるちゅうたら、絶対やりますから」。

それから草津〔の栗生楽泉園〕へ寄ったときも、草津の革新系の人たちから、わたしは歓待されて、ビールをものすごいもらいましたことを記憶しております。〔栗生楽泉園の自治会は、共産党系の人たちが〕多かったですよ。それで、みんな敬遠しておりました。あすこに行くと「やられるぞ」っち言うて。わたしは歓迎されましたよ。「この男は、ほんものぞ」って言われましたよ。

甥の嫁が村のひとにロコミで

〔家族との関係ですか？〕わたしは、うちには「ちょっと旅行してくる」ちゅうって出とった〔まま収容された〕ですからな。うちには、本病とは知らさずにですね、ちょいちょい帰っておりました。ほれで、うちの母からあとで聞いたんですけど、「おまえとこの息子はどこに行つとるかちゅうて、よお巡査が訪ねてきた」っち言いよったですよ。それで、わたしの住所はうちの母はわからんですからな、「うちの息子は行方不明じゃ。そんなひとを捜すのがあんたがたの仕事でしょうが。捜してくださいと、おれは言うた」って言うておりました。

それで、終戦後〔うちに帰省したさいに〕母がわたしに哀願しました。「おまえ、うちに帰ってきてくれんか」言うた。〔しかし、わたしは〕「あんたがた健康なひとは、どうにかなる。わたしは、敬愛園（ここ）に1,000人の病者がおる。その病者に、わたしは奉仕する気持ちでまた行くんだ」って言うてですね、〔母の願いを断りました〕。

そして、昭和51年ですか、母が亡くなったちゅう電報が来ましたからな、そのとき、うちの甥にわたしは「こんどは、おれは帰るぞ」ちゅうてですね、母の葬式には堂々と帰りました。そんなときは、病気だつてことを、もうはつき

りわかってからですね。「いつまででも隠れとらんぞ」ちゅうてですね、行きました。

そしたら、甥の嫁が〔ここに〕面会に来ました。「おじさんは、鹿児島あたりで商売でもしとるか思うとったが、そんな療養所におるんだったら、あたしが見舞いに行かにゃあ」ちゅうて。甥は、うちの母の古い考えの教育を受けとるでしょうが。〔母は〕「絶対、オジの話はするな」っち言うておったらしいですよ。「その話をしたら、また話が新しくなるから、絶対するな」っち言うて。その教育を受けとるもんだから、甥は絶対面会に来ませんでした。ただ、嫁が来て。「来年はわたしが、自分の夫を連れてくる」っち言うて、嫁が連れてきましたよ。

そして、嫁がですね、よお来るようになって。「わたしはもう絶対、隠しません。村に帰っても、おじさんは公園みたようなきれいなところに住んでるよって、わたしは宣伝するよ」。そしたら、村の人たちがですね、「ええっ、坂口はそんないいところにおったら、おれも連れて行ってくれ」ちゅうて、村のひとを交替で連れてきておりました。そしたら、その人たちが、「ほんと、坂口はいいところに住んどったぞ」ちゅうたら、また次のひとが「連れて行ってくれ」っていうて。それがもう口コミになって、「坂口はいいところに住んどる」ちゅうてですね、うちの嫁がそんなにピーアールしとったらしいですね。

それで、このごろは、ここで長生きしたら、外のひとが亡くなって、わたしはもう、帰るところなくなりました。肉親はみんな亡くなってしまってますね、家は空き家になつとらしいです。〔その嫁も〕亡くなりました。甥も亡くなりました。

そして、わたしの友達なんかに会ってみても、「坂口さん、あんたが星塚町って書いて手紙をくれよったが、あれは敬愛園のことだね?」「あら、あんたがた、どうして知とる?」「毎日、新聞に載るよ。あんたのこの〔自治〕会長さんも、恵楓園に来て、会議で話があるよって、写真に出とったよ」ちゅうて、村の人たちが関心をもって見よったらしいですな。それでも、嫌う要素はないですよ。このごろでも、村の人たちから電話がきます。「帰ってこい。泊まるところは、うちでもいいから」っていうて、電話がきます。うちの嫁が、よお、つきあいしてくれたもんだと、わたしは思っています。

裁判に勝訴したときは「よかったな」と

〔らい予防法違憲国賠裁判ですか? 2001年に勝訴したときは〕ああ、よかったなあ、って思いましたよ。最初はもう、あれたちは、あんなことするが、大丈夫かなあと、わたしは思うとったです。見とったです。そのかわり、上野〔正子〕さんですね、あのひとは、いろいろわたしに話ししよったですよ。〔原告の一人として〕名前、貸してくれ」とかなんとか言うたけど、「いや、それはダメよ」っち言うて。〔最後の段階では、わたしも原告に加わりました。いまも〕わたしは「共に歩む会」にも入って、寄付なんかもしております。積極的には動かんけども、やっぱり、賛同者ではありますね。

〔もらった賠償金は〕近親者が都会に出とるでしょうが。子どもが学校に行つて、〔家計が〕苦しいとかなんとか言うから、やっぱり、見ちゃおれんですもんね。「ほんなら、これを学費に使え」ちゅうてね。今度も、わたしの誕生日に、横浜の甥の娘が来るちゅうから、「また、こんども、少しでもあげに

やいかんだろうねえ」と、女房と話してるところです。

横浜に〔いる〕わたしの甥の子ども、いま、大学に2人行ってます。高校時代のとき、ちょっと、反抗期ありました。学校でも問題児じゃなかったんでしょうかね。ほしたら、「おじさーん、先生から電話が来たよ」って言うから、「どんな電話?」「あんたんとこの息子が変わった、と。鹿児島〔の敬愛園〕へ行って、鹿児島のおじちゃんの苦労話、聞いてきたら、ものすごく変わった。勉強するようになったし、ほんと、素直になったって、先生から電話が来たよ」って。ここでいろいろ、わたしが苦労話して聞かせたら、わかってくれた様子でしたね。

こんなに長生きするとは思わなかった

ほんとに、ここでこんなに長生きするとは思いませんでした。わたしなんか、発病当時は、3年もてるかなあと思った。〔敗戦前後の数年は、ここはバタバタひとが亡くなりました。〕もう、1日、3人4人、火葬するのに大変だったですよ。火葬場1つで足らずに、松山に、穴を掘って焼いたこともあります。〔火葬は〕係がおりました。〔だから〕わたしは焼いたことはないですけども、わたしが入ったころは自殺者が多くてですな。それ、みんな怖がって寄りつかんでしょうが。わたしは軍隊におって、毎日のごと、戦死者を扱っておったですから、降ろしかたに引っ張りだされかたですよ。「また自殺者が出たぞ。おまえ、降ろしかたに行つて、連れてこい」っち。

わたし、最初交際しとった女が敗血症で亡くなったときなんか、もう〔園の職員が、故郷の家族に〕危篤の電報もなんも打たずに〔いて、突然〕亡くなったっち〔電報が行つて〕、家族はびっくりして〔ここに〕来ましたですよ。それで、わたしが抵抗して、もうここで絶対、葬式はさせない。わたしが死体をからって出るって、だいぶん、ごねましたよ。そしたら、「坂口さん、すみません。電報を打つたはずのが、その電報は事務部長の引出しのなかに入つたらしいです。ほんとうにすみませんでした」っち言うて断りに来た。それがホントかウソかは知らんけれども。「あんたがたは、人の死を簡単に思うが、人の死というものは、大変なもんだぞ」って言うてな。「死体をかろうて出る」っち、わたしが頑張りましたよ。それで、あのころ、お通夜なんか絶対認めなかったのに、わたしの部屋に、みんな療友（ともだち）が集まって、一晩中、電灯まで引っ張つてもろうて、特別にしてもらったことがある。

それで、わたしがこんな人間だから、わたしの交際しとった女性も、ぼっけもんだつたんでしょう。怒鳴り込んで行つたっち、別館（ふくしつ）に。「おれの男は、絶対、断種はさせんぞ。子どもをつくらぬ性交なんかは、ない」っち言うて行つたっちゅう。

まあ、ほんとに、若いときは、こんな病気になって、残念で残念で、もう首でも括ろうかなと思って、綱もつて、林に行つたことがありますよ。はい。〔それは、ここへ〕入つてからです。ほんともう、残念で、残念でな。しかし、最近の外の人たちのほうも、なんちゅうですか、もう、応援。これにはわたしたちも感謝ですな。それぞれの仕事、生活があるのにですな、わたしたちのこと、こんなにかまっていたくことは、これはもう、ほんと感謝ですよな。

それで、〔敬愛園の〕舎（いえ）もいままでの舎（いえ）は、おまえたちをここに住ましてやるちゅう気持ちの舎（いえ）だったんですが、最近、ほんとに、

おまえたちにはすまなかったちゅう舎（いえ）になって、変わってきましたね。〔わたしたちはこのあいだまでは〕「小鳥」〔寮〕ちゅうところにおりました。〔この新しくできた「あじさい」に〕移ってきたのは2月だったです。〔住み心地は〕いいです、ほんと。「小鳥」〔寮〕を作ったときなんかはですね、園からきた計画書をつっ返して、自分たちで委員会をつくって、自分たちでこれしてくれって作ったんだったんですよ。もう、こんどだけは、職員が思いやりの気持ちで作ってくれたなと思います。

気がかりな将来構想

〔将来構想ですか？〕このあいだ、いろいろアンケートもきましたけどな。外の人たち〔をここに〕入れたらいいと言うけど、問題は、ここの人たちは無償、外の人たちはカネ出さんといけな。これがひとつの問題でしょうなあと思いかたよなあ。人間ちゅうもんは、「いやあ、もう、カネ出さんたちと一緒にでもいい」て言うて入っても、入ったら、一時（いっとき）したら、「ああ、おれたちもあんななったら、いいなあ」と、かならずなるんですよ。わたしたち戦地に行つて病気になったひとと、戦地に行かずに内地〔で病気〕になったひとと、恩給をもらうのに、戦地に行かんだったひとは、半額でもいいからくださいって、その作戦で半額でもらうた。ところが、もらうたその半額の人たちは、やっぱり、文句を言うんです。「おいたちは半額。戦地に行つてたやつは全額。これはおかしい。全額にしてくれ」って。やっぱり、最初は、半額でもいいからもらってください。いざ、もろうてしもうたら、やっぱり、上をみる。

戦地に行かずに内地においてハンセン病になった人たちは、〔最初は、傷痕軍人の恩給は〕なかったんですよ。それで、わたしが、ここでその発案したら、「坂口は、戦地に行つた人たちの代表じゃ。戦地に行かんだった人たちは、別に会議を開け」ちゅうから、「そんなバカなことがあるもんか。自分たちだけ通るからって、のうのうとしとられるか。〔戦地に〕行かんだった人たちにも、ハンセン病になった人たちは、いくらかもうてやらなきやいかんよ」っち。ところが、そのときは「半額でもいいから、もらってください」。もらったら、やっぱり、「差がある」って言い出すからなあ。人間ちゅうのはそんなもんですよ。

それでも、「自分たちは、有償でもいいから〔ここに〕入れてください」って言うても、入つてみたら、やっぱり、タダの人たちをうらやましがる。「おれたちもタダにならんかなあ」っち。やっぱり、人間はそんなもんですよ。

女房が脳梗塞で入院

《女房が病棟（びょういん）に入院してて、いま、わたし一人生活です。9月のはじめに、軽い脳梗塞でした。それも、わたしが、具合が悪いと聞いたら、すぐ気がついて、「ここで寝したらいかん、病室へ連れていってくれ」。そうしたら、看護婦さんたちが「坂口さんは〔気づくのが〕早いですね。お医者さんさえも〔まだ〕どんな病気かわからんのに、あんたは、そら、きた！ いよいよ始まった、ちゅうて。寝せたら、いかん。すぐ連れていってくれ、ちゅうて」って。もう、わかるですものね。「具合が悪い」ちゅうから、「どんなにあるか？」って言うたら、「血圧がすこし高くて、眩暈（めまい）がしだした」っていう。

他のもんだったら、「ああ、具合が悪かったら、そこに一時（いっとき）横になりなさい」。わたしは、そんなことせずに、「すぐ行け」。お医者さん、びっくりしたって。「[わたしにもまだ] どんな病気かわからんのに、坂口さんは、わかっとったもんね」ちち言うて。——〔女房は〕もう、トイレぐらいは一人で歩いて行けるようになりました。言葉もはっきりわかりますし。ちょっと不自由になっとった手も、もう、箸を持ってご飯を食べるようになりましたしですな。

〔わたしは〕一人暮らしで不自由ですけども、ここの職員の付添いさんをお願いしたことは、なんにもありません。自分で〔すべてやっています〕。もう、片手で、なにも掴まれんから、掴み取りですよ。卵なんかでも、冷蔵庫の中で、追い回して、触りかたですよ。握れんから。ああ、こりゃ、手じゃ掴めん。杓子を持ってきて、それで追い込んで。これでいかんだったら、これでいこうちゅうとこです。〔介護員さんも〕びっくりしとりますよ。腰が痛くて動けんようなときもありましたけども、もう、絶対、ひとには〔頼らん〕。また、ひとがしたことでは気にいらんですな（笑い。）」

* * *

以上のところまで原稿確認の共同作業が一段落したところで、坂口さんは「よお、まとめてもらうとります」と言われた。福岡としてはまだ気になっていたことがあったので、「坂口さんの話は、戦争のところアッサリしてるんですが、もしよろしければ、坂口さんにとって、兵隊で戦争に行ったっていうのが、どういう体験だったのかを、少し、追加でお聞きしたい」とお願いしたところ、即座に「わたしは記録をとっております。わたしの戦歴をずうっと」という応答が返ってきた。「軍隊手帳ちゅうのがありますからな。みんなは、終戦になって、こんな軍隊手帳なんか『焼け』ちゅう指令が来たちゅう。みんな、焼いてしもうて持たんらしいけど。わたしたちは療養所（ここ）におったから、そういう指令（あれ）はなかったから、持っていましたからです。それで、記録を写したんですよ」。

以下、その記録からの一部再現を枠囲みで示しつつ、追加聞き取りの語りを呈示していきたい。

* * *

日支事変、歩兵第十三連隊第十中隊の行動記録

昭和12年7月27日、第六師団に第五動員第一号令下る。 8月1日、熊本駅出発。 8月2日、門司港出港。第三大隊は、耶摩丸にて出港。 8月3日、釜山上陸。 8月10日、朝鮮国境通過。 8月12日、山海関通過、天津到着。 8月12日～9月8日、天津市内警備。

第六師団のなかに、歩兵連隊が4つあるんですよ。熊本が歩兵十三連隊。

鹿兒島が歩兵四十五連隊。都城が歩兵二十三連隊。大分が歩兵四十七連隊。連隊のなかに、一大隊、二大隊、三大隊って3つあるんですよ。その大隊の下に中隊があるんです。中隊の下に小隊がある。小隊の下に分隊があるんです。〔分隊という〕15人ぐらい。小隊は、それが4つ。

あそこ、天津には、イギリス兵、フランス兵、インド兵、それと日本兵なんかおって、警備しておりましたですね。〔このへんはまだ、そんなに戦闘はない。〕それでも、油断しとったら、きれいな中国娘が拳銃を出して、撃ちよったですね。便衣隊（べんいたい）。兵隊が民間〔人〕に化けとるんですな。

9月8日～9月14日、河北省安次。永定河の渡河作戦に参加。

ちょうど天津と北京のあいだに永定河という川が流れています。その渡河作戦が最初の戦いだったですね。この作戦が大変だったですよ。相手は、堤防から撃つでしょう。わたしたちは川を渡るから、諸手で銃を上へあげて。川幅は300メートルぐらいありましたですかね。それで、兩岸は砂地で、真ん中を50メートル〔幅〕ぐらいの水の流れがあるんです。その水の流れが速いこと、1人で渡ったら流されるから、2人か3人組んで渡らなければならなかった。もう標的が大きくなるだけですよ。だいぶん亡くなりました、ここで。

9月14日～9月21日、保定に向かう。追撃作戦。

保定ちゅうところは、わたしたちがいちばん最初に占領した町。

〔当時のわたしは、いわゆる軍国主義の考えに染まっていたから、怖いというよりも〕もう、なんかこう、うれしくて旅行に行くような感じだったですね。〔わたしも鉄砲を撃って、相手を殺しました。〕わたしは、機関銃手だったですからね。あとでは、部隊にその人ありちゅうような……。ちょっと戦争が激しくて、勝敗がつかんときは、部隊長から「十中隊の軽機関銃手、前進！」ちゅう命令がかかるんですよ。もう、絶対信頼しとるんですよ、わたしを。「十中隊の軽機関銃手、前進！」「弾はあるか？」って、部隊長が聞くから、「いや、もう、弾はありません」ちったら、「ぼくが探してくる」って言って。鉄兜を脱いで、いっぱい弾を集めてきて、「大事にして撃てよ」。

それでも、ちょっと大きな町に行ったら、占領してから、しばらくそこで駐屯しますもんね。そうすると、やっぱり、〔むこうの〕大学生なんかと、仲良くなってですね、いろいろこう、意見交換するときは、わたしなんか、「わたしとあんたは、なんの恨みもありませんよ。しかし、国が仲が悪くて、『行け！』ちゅうから、自分たちは国の命令で来ているんだ。ここに戦争に来た以上は、自分の命を守らにやいかんから、中国の兵を殺すこともありますよ」ちゅうたら、「ミンパイ（明白）」「わかる」と言ってましたよ。「ミンパイ、ミンパイ」。——〔それは〕筆談。筆談でわかりますね。

9月23日～25日、正定、石家荘の攻略戦。

わたしたちはもう、第一線部隊で、第一線を突破したら、あとの警備に来るひとたちは、年取った予備兵が来ていましたですね。わたしたちはもう、年中、

第一線ですよ。

9月26日、中支転戦のため、石家荘出発。列車で塘沽到着。

そんなとき、もう、一戦争終わったから、内地に帰れるんだって噂があったから、喜んだところが、なんだ、船に乗って、あすこですよ。有名な、杭州湾敵前上陸ですよ。

9月27日、塘沽にて乗船出港。黄海を南下。

11月5日、杭州湾敵前上陸。

威風堂々という光景は、この光景でしょうねえ。日本（にっぽん）の兵隊を乗せた船がズラァーッと続いて、その両〔側〕は、海軍の小さい船が護衛してですね。いちばん先導は、巡洋艦霧島ちゅうたから、何万トンでしょうか、島みたいな、大きな軍艦ですよ。それが誘導して。それから、ちょっと行動がおかしくなったから、どうしたんだろうか、ちゅうたら、イギリスの軍艦が来て、モールズで「どこに行くか？」って。ちょっと身をかわずっていうて、朝鮮の仁川（じんせん）ちゅう港に、ぜんぶ入って、避（よ）けましたよね。〔このあと、ずうっと、毎日毎日、戦闘。〕有名な、あの、水の都、広州なんかも通りましたよ。

12月10日～13日、湖州南京間の戦闘。南京城攻略戦に参加。

わたしたちが南京城に入ったところが、まだ蒋介石の、外套が下がっていました。いま、飛行機で出た、って言っていましたね。

〔南京大虐殺？〕あれが、わたしたちはおかしいと思った。報道班員が撮った写真でも、死体なんか1つ、2つは見たけど、そんなに大量に死んでおったのは、わたしたちは見ませんでした。わたしたちは、もう、どんどんどんどん、敵を突き破っていく。わたしたちは、ほとんど最前線ですからね。それで、わたしたちの常識からみたら、あれはどうか、と思うんですね。あとから来た部隊がしたかどうかは、知らんけども⁴。

そして、〔攻略して〕南京に入ってみたら、国際連盟——あゝころ、国際連盟って言っていましたですかね、「国際連盟指定難民救済所」って言うて、札が貼って、綱が張ってありましたよ。日本（にっぽん）兵は入れませんでした。中国兵がそこにどんどん逃げ込むのはわかっておるけど、入れんのですよ。こんどは、キリストの教会なんかに、どんどん逃げ込むから、行ったら、外国の神父さんがですね、「兵隊さん、おりません。帰ってください」。

昭和13年9月15日～10月4日、田家鎮要塞攻略戦に参加。

⁴ 坂口さんの語りによれば、坂口さんは「南京城攻略戦」に参加したものの、自分の目では「大虐殺」は見えていないと言う。じっさい、彼の所属する部隊は、昭和12年12月10日から13日までの、わずか4日のみ、南京に滞在しただけで、次の「攻略戦」に備えて移動している。「あとから来た部隊が〔大虐殺を〕したかどうかは、知らんけども」というのが、坂口さん自身の体験のありのままの語りなのであろう。

とにかくもう、部隊が半分になったことがありましたですよ。田家鎮（でんがちん）いうところの要塞を〔攻略したとき、逆にこっちが〕もう、何個師団っちゅう敵から包囲されてですね。山の中に、こっちは立て籠もって。あれ、ものすごい頑固な要塞だったですよ。「東洋のマジノ線」って言っていましたよ。わたしたちは十中隊。隣の九中隊は、250人の兵隊が、中隊長以下〔戦死して〕30人しか残らなかつた。〔仮の〕隊長は軍曹〔がなつた〕。昔、中国人が飴を売りに来的时候、ピー、吹いてた。あの笛を吹いて、あがってくる。もう気色（きしょく）が悪かったですよ。そうすると、隣の中隊が、わたしたちは十中隊だから、「十中隊、大丈夫かあ？」って言うと、こんだ、中国の将校が日本語知つとるんでしょね。「十中隊、大丈夫か？」って真似してくるんですよ。支那にも、やっぱり、いろいろ神話みたいなあれがあるんでしょね。紅槍兵（こうそうへい）ちゅうて、槍を持つとって、槍の先に赤い房が付いとるんです。それが、槍を持って、夜中に突っ込んでくるんですよ。殺してみたら、槍に、きれいな赤い房が付いてる。それが、どんどん、妙な笛を吹いて、突っ込んでくるんですよ。そして、見てみたら、きれいな札束を持ってる。そんなのを、やっぱり、くれてやるんでしょね。折り目も付いていない中国の紙幣を持つとですね。聞いてみたら、「この槍を持つとつたら、絶対、敵には負けないうちゅうあれがあるんだ」ちゅうてですね。〔それと〕支那の女の兵隊、娘子軍（じょうしぐん）ちゅうて、ちょうど日本のバスガイドみたような、紺色のあれを着て。皮のバンドを締めて、スカートを履いて。あれを拿捕（だほ）したことがあるんですが。川を渡ってきよったとこをですね。

昭和13年10月17日～11月12日、武漢攻略戦に参加。……
 昭和15年4月12日～7月10日、宜昌作戦に参加。……
 9月13日、董市駐留中、六師団第四野戦病院に入院。

診察へ行つて、わたしが症状を話したら、軍医が腕組みをして、ウーンって考えとつたが、昇汞水（しょうこうすい）の中に、聴診器も入れ、自分の腕もまくって、こう、浸けましたですもん。もう、わたしは、びっくりして、頭、真っ白くなりました。聴診器もぜんぶ、消毒液の中に浸けてしまいましたもの。自分の腕もまくって、浸けてですね。こうして、こうして、考えこんでおつた。わたしは、どうもない、ちょっと皮膚が知覚（かんじ）がないぐらいで、元気なのに、なんでかな、と思つて。もう、頭が真っ白くなりました。

〔昭和12年、13年、14年、15年と〕中国大陸、明けても暮れても駆け回りましたよ。〔戦闘、戦闘、戦闘。〕一戦争終わつて、兵隊が消耗したら、すぐ後ろから予備兵が来ておりや、補充しておりましたですからね。

生きた捕虜を銃剣で刺す訓練も

〔戦争つて、いまから思うと、何だったか、ですつて？〕まあ、馬鹿なことをしたな、ちっ思うたな。日本（にっぽん）政府は。いまから考えたら、ですね。ほんともう、わたしたちは、無駄骨を折つたと思つています。

そのころはもう、一生懸命だったですよ、「御国の為」と言うてですね。もう、国の言うことをそのまま信じておりましたですからね。

〔捕まえた捕虜を若い兵隊に銃剣で殺させるようなことはあったか、ですって?〕それは、ありました。はい。あの、内地から来た兵隊に、〔生きた捕虜を〕銃剣で突くあれをですね、練習させよったです。——〔国際条約では〕捕虜は人道的な扱いをせにゃいかん。〔しかし〕日本の軍隊には、それがありませんね。

まあ、わたしたちは古兵だったですから、それを教育するほうだったから。新しい兵隊は、思い切り突けんですから、入らんです、銃剣が。「こうしてやるんだ!」って、グサッと、ぼくらが、やりましたよ。いまから考えたら、身震いするようなこと、あのころ、平気でできましたよ。初年兵を教育するのにですね、「そんなやり方じゃ、ダメだ! こうして突くんだ!」って。バサッと。背中まで通す。

〔従軍慰安婦?〕あれはですな、なんか、日本軍がかかわったちゆうけど。じゃあなくて、韓国〔の娘〕なんか、親方が連れてきてとりましたよ。商売でですね⁵。そんなのは、わたしたち知っていますけどですね。あの、大きな町にはですね、フランスなんかからも来ていましたよ。それと、ロシア。もう、

⁵ 坂口さんは、「慰安所」の設営には軍の関与はなかったむねの発言をしているが、上等兵という一兵卒の立場にあった彼からは、「親方」が「売春婦」を連れてきて、「商売」として「慰安所」が存在したように映じていたのであろうが、そもそも、「従軍慰安所」の設営に関する業務に携わったのは、「参謀」クラスの軍人であったようだ。

サイパン玉砕戦を「陸軍中佐」「第四十三師団参謀」の立場で体験した平櫛孝(1908年生)の『肉弾! サイパン・テニアン戦』(共栄書房, 1979)では、著者は、「慰安所」の設置にかんする自らの体験を「命令にない命令」という見出しのもと、こう書き綴っている。「さて〔昭和19年5月に〕サイパンに上陸してから、サイパン港に陸揚げした弾薬兵器の運搬集積、サイパンの地形偵察など、毎日毎日がスケジュールでいっぱいだった私には、もう一つ課せられた仕事があった。もっともこの仕事には『そう急がない。だからといってそうゆっくりでもこまる』という条件つきで、口答(ママ)で伝えられたものである。この奇妙な仕事とは、『慰安所』の設置だった。/時期的に、第四十三師団よりさきにサイパンに来ていた、陸軍部隊や先鋒格の海軍部隊は、それぞれこのためのなんらかの施設(?)らしいものを持っていた。日本軍首脳部は、サイパンをあくまでも兵站基地としか考えていなかったもので、将来増加する南方への兵力移動のためと、今度の第四十三師団の兵の増加とともに予想される海軍部隊とのトラブル防止のためにも、この施設の増設はたしかに必要であった。急ぐような急がないような、仕事ではあるが、師団命令に出すべきものでもない。/情報と後方の参謀を兼ねていた私は、後方参謀の任務のなかに、こうした仕事があることは知っていたが、私に女郎屋の開業準備は、少し荷が重かった。/ある日、その日の仕事が予定より早く終わったので、日暮れまでの時間(サイパンの日没時間は午後8時ごろ)をさいて、チャランカノアの海岸近くに慰安所用地として選定しておいた地区(くしくもここは米軍上陸地点となった)を偵察した。(中略)/そのころは、ガラパンがサイパン最大の街で、チャランカノアは南洋興発の社宅村として第二の市街地だった(中略)。/チャランカノアからガラパンの街にはいるところはゆるやかなのぼり坂があった。この坂をのぼってガラパンの街にはいると、すぐ料理屋が軒をならべていた。料理屋といってもけっして高級料亭ではなく、先遣されていた陸・海軍将兵のための慰安所であった。彼女らは夜になると戸外に進出してヤシの葉陰で、涼風下のサービスを売り物としていた。(中略)/その後のサイパンの運命を考えると、信じられないほどのん気なこの任務も、やがて6月にはいって米軍の空襲が激しくなり、もはやそれどころではなくなったのである」(79-84頁)。

フランスの、そういう売春婦なんかは、きれいなシャツを着て、自転車に乗って、兵隊が通ったら、口笛で合図していましたよ。自転車、サッと通ってですね。ロシアの女性なんか、体格がいいでしょうが。もう、すばらしい体格の女性が来ていましたよ。「ニッポンの兵隊さん、かわいいね」って言ってましたよ。そんなのはありましたよね。

〔日本人の女性もいましたが〕日本人の女性は、たいてい、将校用ですね。一般の兵隊用は、韓国とか中国のひとつなんかですよな。売春婦ちゅうのは親方が連れてきて。やっぱり、カネ儲けの組織があったんじゃないでしょうか。カネは、ぜんぶ、もらえん、って言ってましたよ。「カネは、自分たちはない。親方が取ってしまう」って言ってましたよ。

〔食糧の調達ということで、農家から食べ物を奪ったりしたことはなかったか、ですって?〕よお、わたしたちは物々交換しよったですよ。菓なんか、むこう欲しがったりしましたからですね。そんなのと、むこうからは、米なんかと交換してはありましたですよ。

いちばんびっくりしたのはですね、中国の、もう、山の中ですよ。「何かないかなあ」と家の中へ入ってみたら、「兵隊さん、何が欲しいの?」と。「あらっ。あんた、日本(にっぽん)語できるの?」ついたら、「わたしや、日本(にっぽん)から来てる」ちゅうてですね。その子どもが「兵隊さん、戦争はいつ終わるの? わたしは長崎におりましたよ。また、日本(にっぽん)の学校に行きたい」って言うてですね。あんなときは、ほんとう、懐かしいですね。古い明治時代の女の服装した写真と。日本(にっぽん)の昔の、一銭硬貨とか二銭硬貨、あんなのがある家がありましたよ。ああ、こんな奥地にでも、ニッポンの女が来てるんだなあと思ったことがありますよ。

戦友会にもずっと参加

〔同期の集まり?〕わたしが戦友会があるのを知ったのは、どのくらいからだったでしょうか。誰か戦友が教えてくれたのがおったですよ。「行ってみようか」というので、行って。行ったら楽しいもんですからですね。わたしは〔ずっと〕行ってましたですよ、熊本に。

わたしはぜんぜんもう、病気の話なんかしませんでした。それでも、勘づいたもンがおってですね。「おまえ、神経痛がくるか?」って聞いたことがありますよ。「うん、神経痛がくるよ」と言うたら、「神経痛がきたときは、おれにすぐ手紙出せ。おれが専門の先生、紹介するから」と言ってくれたひとがおった。——戦友っていったら、やっぱり、もう、親子以上ですね。親子兄弟以上ですよ。〔戦友会には〕最近まで行ってましたよ。いまから10年ぐらいになりますかね、解散しましたよ、みんな年取って。健常者も、みんな、膝が痛いとかなんとかって、杖ついて来ておりました。わたしがいちばん元気だったですよ。「わたしは、鹿児島から汽車とかバスとか船とか、5、6回乗り換えて来たぞ」言うたら、びっくりしていましたよ。

〔戦友会でみんな集まったら〕やっぱり、戦中の話をしたり。現在の家族の話。——家族の話なんかすつときは、ちょっと寂しかったですね。そんなときは、控えて、わたしはもう知らんふりをしておりました。

〔あの戦争はバカなことをしたものだ、というような話は〕出ない。やっぱり、みんな、もう、保守のガリガリですからな。とくに隊長さんなんかは、ひ

どいです。

わたしたちが現役時代、兵舎におったころ、いちばん怖かった隊長さんが来とったのですがね。ほいで、わたしが行って、「隊長さん、隊長さんから鍛えてもらってたおかげで、現在ではもう、ちっとやそつとのことじゃ、びっくりしないような人間になりましたよ」ちゅうたら、椅子に座とったのが、下に降りて、「おまえたちから恨まれとると思うとつたのを、そんなに言うてくれたら、うれしい」って、跪（ひざまず）いて挨拶しましたよ。

わたしなんかは、昔、班長に——まあ、伍長ぐらいですよ。兵隊からちょっと階級の〔あがった〕——ものすごく鍛えられたんだけど、ほかの者は軍隊から帰ったら、みんな、名前だけ呼んでましたですもんね。隊長さんにでもなんでも、渡辺さんなら「渡辺さん」とか。わたしゃもう、軍隊時代の階級言うて、「班長殿、班長殿」と言っていましたからですね。そのひとが死ぬちょっと前に、「坂口君が最後まで『班長殿、班長殿』と言ってくれた、その響きがひじょうに懐かしかった、うれしかった」ちゅうて、わたしに電話がきました。一時（いっとき）したら、こんだ、そのひとの娘さんから「亡くなった」って言ってきました。

「営門進級」なしに上等兵のまま

軍隊でも、ひじょうにこの病気は偏見があって、ほんとうは〔陸軍病院から〕退院する前には、本隊に帰って、「営門進級」と言っていました。営門を出るとき、かならず階級を1つあげてもらってた。わたしなんかはもう、原隊にも復帰できずに、病院からすぐ「永久兵役免除」ですよ。軍隊から追放。それで、よお、この病者の会合に行っていました。軍隊のこと、わたしはあんがい詳しいほうだったですから、みんなが「坂口さんは、兵学校に行ったんじゃないか」とかなんとか言っていました。「いや、おれは上等兵ぞ。戦時中に4年も5年も軍隊におって、上等兵でおるのは、おれ1人だろう」と。あんまり銃の扱い方も知らんひとなんかでも、下士官になって戦地へ来ておりましたからね。あとでは、下士官なんか足らずに、どんどんどんどん進級しておっらしいですもん。それで、もうわたしがびっくりしたのは、わたしと同期生だった、わたしたちより成績が下だったひとたちが、みんな、曹長とか軍曹とかになっておりましたですもんね。

Discovering Hansen's Disease Symptoms during World War II in China: Interview at Hoshizuka-Keiaien, a Hansen's Disease Facility

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

This is the life story of a man living in Hoshizuka-Keiaien, a Hansen's disease facility.

Moriyoshi Sakaguchi was born in Kumamoto prefecture in 1916. He was discovered to exhibit symptoms of Hansen's disease while he was fighting in the battlefield in China and as a result, was sent back to Japan. He entered Hoshizuka-Keiaien in July 1941. He was 93 years old at the time of the interview on June 20, 2010. Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka, and Sajik Kim acted as interviewers for this study. The interviewers read the script in front of the interviewee twice on January 23 and April 22, 2011 for revision and approval.

When we learned of his life story, we found that he possessed much pride for living a life of resistance.

He passed the health check for the military draft and joined the army in January 1937. When he received a letter from a girl in his village, the squad leader said to him, "Order the girl to stop sending letters to the camp." However, he replied, "I do not have the right to order her to do that." This kind of resistance would negatively affect his career in the army but he was not concerned about it.

On November 1940, when he was sent back to Japan for having symptoms of Hansen's disease, a nurse visited him to cut his long hair before he landed on Moji but he was offended because she insisted on wearing a fully protective suit out of fear of contracting the disease and refused to let her to cut his hair. In the end, the head nurse cut his hair without the suit.

In 1944, during the war, when patients were forbidden from leaving the sanatorium, he went out of the facility without permission. He was caught by the guard of the facility and was subjected to solitary confinement as a penalty. After he was released from confinement, the office head tried to force him to write a formal apology but he refused because he believed that the penalty he had endured was more than enough.

In the same year, he got married in the facility. Both the authorities and the self-governing body of the facility recommended him to undergo sterilization but he refused. The officials at the sanatorium would not allow him to live with his wife in the room designated for a

married couple within the facility. He sneaked out of the facility and went to his hometown to officially register his marriage. He persuaded the head of the facility that he had the right to live with his wife in the room for a married couple because he was legally married. Ultimately, six years later, the facility allowed him to live in the room without undergoing sterilization. His wife became pregnant but miscarried the baby due to septicemia, so he buried the dead body of the fetus by himself, hiding evidence of his wife's pregnancy.

After the war ended, patients within the facility were able to obtain increased rights from officials within the facility. Subsequently, the patients were further factionalized due to an ensuing power struggle from within the group. In order to assuage the intensifying power struggle, a congressman and police chief were brought into the sanatorium to intervene. Sakaguchi did not change his attitude of resistance even toward the congressman and police chief. The head of the facility once tried to bribe him into cooperating but he refused, throwing money in his face. He considered his life in the facility to be a life of resistance.

After receiving approval of the interview transcript from Sakaguchi, we asked some questions about his experience during the war that he had barely talked about during the interview. In response, he showed us personal records of various events that had taken place during the war. We learned that he did not intentionally hide what he had experienced during the war, and shared only his experience as a Hansen's disease ex-patient because he thought we were only interested in that part of his life. He did share an additional story about wartime experiences, however. When he was a lance corporal in the army, he trained young soldiers to stab live prisoners of war with a bayonet and kill them. He said that now he realizes it was a horrifying experience but he did it with nonchalance at the time. As interviewers, we thought it would be valuable to ask about his experiences as a soldier to provide a more comprehensive account of his life.

Key words: Hansen's disease, Segregation Policy, life story